

みんなのひろば

視点

前回の寄稿で「エピテーゼを学べた喜び、その時の気持ちを忘れないと胸に刻んだ時」が人生最初のターニングポイントだったと述べさせていただきました。第2のターニングポイントがエピテーゼのスキルを学んだ2年後に訪れました。

そもそもエピテーゼのスキルを学んだからといって初めからクオリティーの高い修復物を作れたのかと聞かれれば決してそうではありません。教科書があるわけではないので自らの力で考え試作し作り上げたものも数多くあります。何度トライしてもうまくいかないことも頻繁にありました。

歯科技工士としての仕事を続けつつ、エピテーゼの技術を向上させるため何度も失敗を繰り返しながら、良いものを作ろうと製作に励みました。納得いくまでサンプル作りや反復練習を行い、仕事として成り立たせることができただけです。ただこの時はいかに見栄えのいい補填修復物を作れるか「職人として製作すること」を中心に考えていました。

転機となったのは短期間ではありませんが長年の願いがかないエピテーゼを製作するうえでかねてより憧れの地であったアメリカにあるカリフォルニア

ルニア大学ロサンゼルス校(UCCLA)の顎顔面補綴科への研修に参加した時です。UCCLA顎顔面補綴科では実際の臨床の場にも毎回立ち会うことができ多くの発見ができました。しか



高崎市片岡町

はぎわら けいこ
萩原 圭子

歯科技工士

— 使用者の思いを第一に —

一人の患者さんのために 歯科医師・歯科技工士・歯科衛生士・患者さんに携わるスタッフみんなが一丸となって、「どうすればこの患者さんにとって一番良い結果になるか」「ただ補填修復物を作るだけでなく作った後、患者さんが扱いやすいようにどう工夫してあげるか」など、みんながアイデアを出し合っていたことです。普通のことではないのか?と考えられがちですが、一番難しいと思います。患者に寄り添うチーム医療の現場を目の当たりにした時が私の第2のターニングポイントとなりました。

UCCLAに行く前はあまり意識しなかったのですが、今では患者さん自身の情報がとても大切と考えるようになりました。患者さんと接する際は、できるだけ多くの情報を得るようにしています。使用する方の立場になり、どういった状況でエピテーゼを使うのか、趣味に合わせてもつとこうしてあげよう、毎日使うなら硬い素材で作ろうか、利き手が使えないから装着方法を工夫しようなど、ただ良い物を作るということだけでなく扱いやすさやメンテナンス、使用する方の思いを第一に考えながら製作に取り組める技術者へと変わることができました。

【略歴】歯科技工士の傍らエピテーゼの技術を学び、2011年に萩原歯研・エピテーゼ製作室メ

ディカルラボKを開設。製作技術者の育成にも取り組む。高崎市出身。

エピテーゼと出会う②